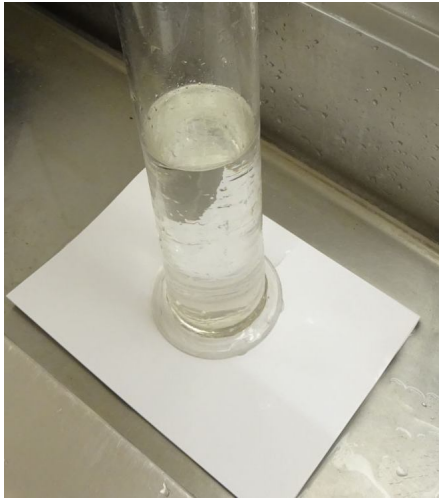


「水は水色だった!(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

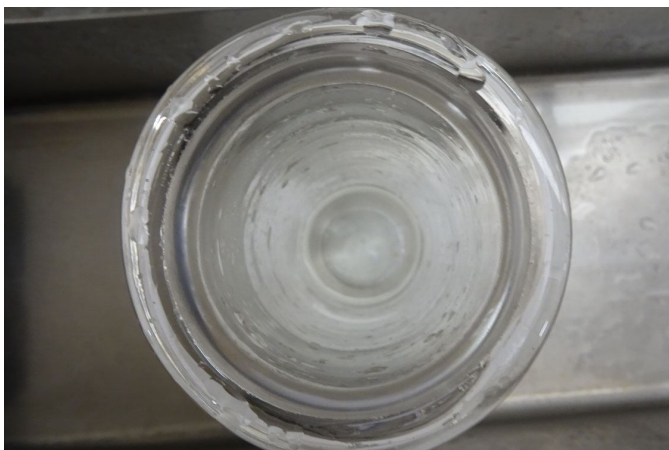
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



次に、容器に半分ぐらい水を入れてみた。下には白い紙を敷いたままだ。いきなり満水にするよりも、「水の量が増える」---つまり「少しずつ液体の層を厚くしていく」ほ

うが、実験としては正しいと思ったからだ。



これがその結果だ。「わずかに青い」といえばそんな風にも見えるが、ほぼ無色である。やはりこの程度の「液体の層の厚さ」では実感できないのだろうか?

最後に容器に水を満たしてみた。横から見ただけでは、単なる透明な普通の水だ。我々の身体も、約60%はこの水でできている。考えてみれば不思議なことだ。

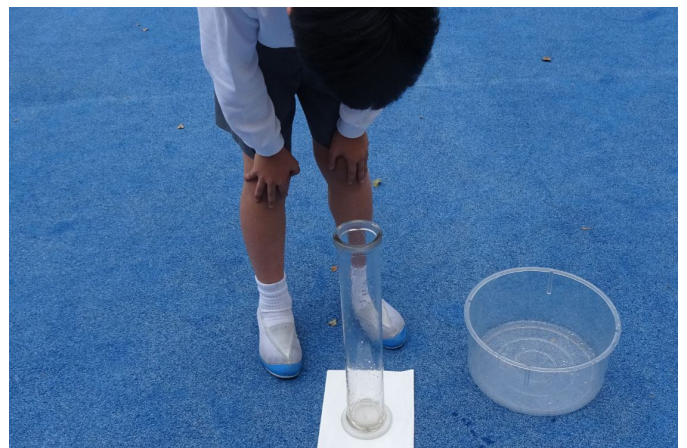


これが水を満たした容器を、真上から見たところだ。先入観なしに見ても、確かに「青い!」青というよりは、まさしく「水色」である。やはり水は「無色透明」ではなく「有色透明」だったのだ。

しかし、この実験は、室内で蛍光灯の光で行っている。自然光でしなければ、本当に色がついているか試したことにはならないと思った。



晴れた日には、青空が水に映り込む。私はあえて曇った日に、校舎の屋上で試すことにした。



まずは、何も入っていない容器を、子どもたちに真上から見てもらった。子どもたちには、何を試す実験かは伏せておいた。「何が入ってるの?」・・・